巻頭言

「風土」と農業

りんかい日産建設株式会社　取締役相談役　山口　竹彦

昔学生時代に読んだ本の中味なぞはほとんど忘れてしまったが、不思議に時間が経っても記憶に残っている本もある。私の場合は哲学者 和辻哲郎の「風土」がそういう数少ない本の一冊であるように思う。彼は気候、風土というものがその国民の気質とか性格に影響し、それが文化、芸術等にまで及ぶという。昭和の初年にドイツに留学に出る時に船旅で神戸からアジア、地中海を経由しヨーロッパに渡り、各地を巡り思索を深めたようである。そして世界を、日本を含む高温多湿な「モンスーン地帯」、アラビア、アフリカ等の乾燥した「砂漠地帯」、そしてヨーロッパに見られる「牧場地帯」に分けて考える。ヨーロッパは夏の乾燥と冬の湿潤とで雑草を生やさずに牧草が育つ。夏の乾燥が雑草を駆逐するため、ヨーロッパの農業では雑草との闘いがない。土地は一度開墾されれば何時までも従順な土地として人間に従い、農業労働には自然との戦いという契機が欠けている。極言すれば農民は耕した土地に小麦や牧草の種を蒔きその成長を待っていればよい。

これに対してモンスーン気候、特に日本の場合は、高温多湿であり、豊富な湿気が食物を恵むと同時に、暴風や洪水として人間を脅かす。自然に対して忍従的にならざるを得ない。そして日本の農業労働の核心をなすものは「草取り」であり、雑草の駆除だと言う。これを怠れば農地はたちまち荒廃してしまう。日本人にとって最も苦しい高温多湿の夏に繁茂する雑草と戦わなければならない。そこに日本人の勤勉さが、また忍従、耐え忍ぶという気質が国民性として長い歴史の中で培われてきたと言いたいのであろう。風土が農業のあり方を規定し、さらには日本人の国民性に大きな影響を与えたという指摘は十分理解出来るところである。かつて我が国において農業従事者が圧倒的に多かったことを考えれば、農業のあり方が日本人の国民性を育んだのももっともであろう。そして時代は移り、就業人口に占める農業従事者の比率も昭和初年当時五割近くのウェイトだったのが、戦後四割、三割と減り続け、足許では令和二年末で二〇七万人、三・一％にまで低下している。ＧＤＰに占める比率に至っては戦後すぐに約三割あったものが令和一年には〇・八％にまで小さくなっている。

しかし、安全、安心な国土作り、国土保全上も農業の重要性は変わらない。食料自給率についてもしかり。ましてや新型コロナウィルスのようなパンデミックが何時なんどき発生するかも判らない時代である。そして先ほど触れさせて頂いたような日本の国民性、気質に農業が与えてきた影響といったことを考える時、時代が変化する中で農業がその重大な責務を果たすためには、効率的な農業経営を可能にする農業政策が今日、色々と求められているところであろう。弊社としても、いささかなりとも変革期に立つ日本の農業にお役に立つことが出来れば望外の幸せと思っております。

また、この三月で東日本大震災から十年が経ちましたが、あの惨状から農地が往年の輝きを取り戻しつつあるのも、関係各位の多大なご苦労があったものと拝察します。感謝あるのみであります。